

自己調整による思考の変容可能性 —大手町小学校「学びのノート」の分析—

増井三夫*・野田 晃**・田邊道行**・朝井宜人**

(平成21年9月30日受付;平成21年11月5日受理)

要 旨

学習理論および教育実践学の領域で、活動の自己調整が重要な研究及び実践上のテーマとなっている。そこでの課題は、学校現場からみれば、実際の学習過程における学習者の自己調整のメカニズムの解明にあるとよい。本稿はその解明を試みたものである。我々はすでに上越市立大手町小学校との共同研究で、このテーマに取り組み、その成果を別の機会に公表し、一定の評価を得た。今回は、同校が平成17年に導入した「学びのノート」をデータとして、研究対象児童(5年生4名)が自己の学びをどのように・どのていど自己観察し、思考を自己調整しているのかについて分析した。考察の過程と結果は、我々のカンファレンスで合意されたものである。結論として、「学びのノート」の記述が自己の活動全体の分析的な自己観察になり、その記述が肯定的な自己評価を強化している場合に、思考を自己調整している顕著な傾向が読み取れた。

KEY WORDS

学びのノート learning note 自己調整学習 self-regulated learning メタ認知 meta-cognition

1 課題設定

自己調整学習という用語は、子どもが「自分自身の学習過程の中で、メタ認知的に、動機的に、行動的に、自己調整をする」と限定しておこう¹⁾。もう少し簡明に表現すれば、子どもが自己の学習行為を自己調整する、と言い換えてもよい。そして自己調整には、メタ認知的モニタリング→自己効力感→メタ認知的コントロールが機能していることについては共通に認識されている。しかしこれが実際の授業場面でどのように機能しているのかについては個人差を含めて現在の主要な研究テーマになっている。ここではそれを実践研究の立場から検討することになる。

最初に、自己調整学習ではメタ認知的モニタリングが学習の「軸」となっていると理解されている²⁾点に注目してみたい。この指摘は実験研究によって量的に明らかにされたものだが、質的な授業研究でも確認される。ただし、授業研究では、個々の子どものメタ認知活動は授業中の活動と授業後の「振り返りシート」が主たる考察対象になる。我々のこれまでの共同研究は石崎洋子の話し合いの授業場面を分析対象とした。この詳細は別の研究報告³⁾を参照していただきたいが、我々が重視している話し合いが「他人の目や判断基準をメタ認知としてうまく「借用」する」ように機能していたと評価されている⁴⁾。

いま一つの我々の研究テーマはモニタリングの解明であった。この点に関して我々が高く評価した鈴木美幸の授業で、鈴木は次のような指導をしっかりと行っている。第1に、目当ての設定、第2に、活動の目当てを自覚させ、意識づける、第3に、活動後の振り返りの視点の提示(目当てについて「どうであったか」、うれしかったと・楽しかったことなどの自由記述例)、である。とくに第1と2の指導は他の教師の授業に比べて徹底している。さらに第3の「振り返りシート」の視点提示について注目しておきたいのは、肯定的な自己効力感を強化する例示が際立っていたことである。

教師の具体的な記述例の提示は、この授業が低学年であったことによる配慮というよりも、「振り返りシート」の書き方を習得させたい理由による。この「振り返りシート」の記述がモニタリングに有効であった。有効として理解される根拠として、その記述が思考過程の自己観察と自己評価になっていることが想定される。すなわち、鈴木の授業実践からみると、活動の感想を記述→活動自体の記述→活動の評価の記述へと振り返りが段階的に変化しているが⁵⁾、その記述は子どもが活動の特性を再構成する仕方(表現方法の工夫)を反映しており、その再構成自体が自分の活動の目標にてらして、活動の局面を具体的に記述し、あるいは思いを直喩的に表現する過程となっている⁶⁾。

このような実践研究の成果にもとづくと、振り返りに見られる思考の過程は、記憶された活動の特性をまとめた文脈として構成する過程であると考えられる。これを別の観点からみれば、振り返りにおけるモニタリングには、情

報全体を読み取り、その特性を解説する読解力が有効な下位過程として機能していると予想される。この予想は、メタ認知活動の個別研究によっても示唆される。例えば、物語文の理解において、文の全体構造を読み取り、それを構成する要旨を理解する力がメタ認知的モニタリングと関係していると報告されている⁷⁾。また、算数文章題の解決にさいしても、問題の内容や目標を十分に理解した文章題の読解にモニタリング能力が問題解決段階で決定的な役割を果たしている⁸⁾。

読解力がメタ認知活動の下位過程として学力向上に重要な役割を果たしている実践研究にも言及しておきたい。その典型的な事例は、京都市立御所南小学校と高倉小学校の「読解」科（年間35時間）の実践に見られる。「読解」科は、課題解決のプロセスを論理的に思考する力を高める目標を掲げており⁹⁾、学校側はメタ認知的モニタリングの向上が学力の極めて高い水準への飛躍に繋がっていると分析している¹⁰⁾。この傾向は大手町小学校の石崎学級と鈴木学級でも同様にみられる。

では、なぜ振り返りが、情報全体を読み取り・その特性を解説する操作能力となって、さらに自己観察や自己評価につながっていくのか。この疑問に答える事例研究は寡聞にして知ることができない。本研究はこの疑問を以下の研究方法からアプローチしたものである。

2 方 法

データ 大手町小学校5学年の「学びのノート」（平成20年度）とインタビュー記録が使用される。「学びのノート」は次の2つからなる。一つは「ネットワークシート」である。これは「帰りの会」で一日の生活（体験）を振り返り、心に残ったことや気づいたこと、考えたことなどを「学びのシール」（シール一枚の字数は約50字以内）に書き、ある程度の枚数になるまで書きため（ほぼ一ヶ月単位）、それらをA3版の「ネットワークシート」に自分の構想で分類し、それぞれの分類に小見出しを付ける。いま一つは「作文シート」である。これは「ネットワークシート」にもとづいた活動全体の「振り返り」であり、原則として教師の指示によるタイトル名が付けられている（本文中では「作文シート」に一を付けて、その次に「」でタイトルを示す）。

半構成的インタビューは、平成21年9月7日に増井と朝井が被調査者A、B（以下データの引用にさいして、氏名はすべてアルファベットで記す）に対して約90分かけて実施し、上越教育大学大学院生によって逐語的に記録された。なおICレコーダーでも録音し、記録の正確をきした。以上のデータの使用については事前にA、Bに説明し、了解を得た。

被調査者 キーパーソンA、類似層B、対極層C、Dとする。A、BはNRTの得点が高く、C、Dは低い。とくにAは担任教師の評価によると活動面での変容が最も顕著であった。

課題 「学びのノート」の作成過程で被調査者たちが自己の活動をどのように振り返り、かれらが自己の思考をどのようにモニタリングし、調整しているのかについて明らかにする。

手続き 「学びのノート」の分析は次のような手順で行った。①「学びのシール」の分類に付けたネーミング（小見出し）の特徴を読み取る。②「学びのシート」から何を、どのように振り返っているのかを読み取る。③上記の2点の変化を読み取る。なお分析にさいしてデータの選定は増井と朝井の協議で決定され、解釈の妥当性は執筆者4名の合意によって決定された。

3 考 察

1) キーパーソンAのモニタリング

平成20年4月のシートは例えば「4/30 今日、畑にうねをつくってなえをうえました。すごく暑くて、つかれました。」に見られるように感想文に近い記述形式が多数を占め、これらは5月12日の「ネットワークシート」で「達成感のあることだ!」といった小見出しの分類に整理される。一ヶ月後の6月16日では、「ワッペン作りをしました。なまえを、ぬうとき、うまくできなかったけど、返しぬいをたくさんするといいいことが分かった。」というシール1枚に「やって分かった」という小見出しと、次のコメントも付されている。「やってみることは、大事だと思いました。理由 見ただけで、「いや」と思ってやらないと損をしようと思ったから。やってみなくちゃわからないから。」6月27日に6月16日のシールを含めた「ネットワークシート」を振り返る「作文シート」－「学びのファイルのふり返し」が作成されている。注目すべき記述が見られる。すなわち、「大変」「心配」と感じる事が少なくなり、うまくできたことやわかったことがふえました。」そしてその理由が述べられる。「このことから、前向きになったのかなあと感じました。これからも、前向きに生きていきたいと思いました。」

活動の特徴を分析的に自己観察することとその活動を肯定的に捉えることが同次元で行われており、その結果として後者が今後の活動の内発的な動機づけに近い「思い」として表出されている。

7月23日の「作文シート」（無題）では新たな分類操作が述べられている。それは「ネットワークシート」から各分類に共通する行動特性を読み取ろうすることである。その箇所を転載しておこう。

「今回は、いろいろなことを書いていたので、全部一つずつに分かれました。分けてみると友達のことをすごいなあと思うことがあることに気がきました。それは、友達のことを思うようになったからだと、思いました。また、「けが人がいなくてうれしい」というシールもあったので、やっぱり友達のことを思うようになったのだなあと思いました。」

Aのここでのモニタリングの特徴は、個別分類から共通特性を読み取り、それにもとづいて自己の活動に新たな意味づけをする点にある。同時に他者認知は他者の行為の肯定的評価をともなって、自己認知に変容を引き起こしている。これに関わるシートも挙げておきたい。「6/19 近藤さんが休みの日に、行ってきた東京から、おみやげを買ってきてくれました。休みの日も、みんなのことをわすれないんだなあとすごいと思いました。」

9月に入るとシートの記事に顕著な変化が見られる。第1に、これまでの感想や出来事の記事が、限られたスペースに、キーポイントを明示するように変わる。例えば「9/12 書写の時にK君とF君がケンカをして、S先生の話で「言葉のほう力」というのがでて、そうだなあと思った。」である。第2に、6月19日のシートで見られた振り返りの形式が「ネットワークシート」の分類と小見出しにも反映され、それがAの振り返りの方法として自覚される。9月18日の「作文シート」－「学びのシールのふりかえり」をそのまま転載しておこう。

「私は、ふりかえりをして、気づいたことがあります。それは、楽しいことなどがふえたことです。ふえたのは、たぶん、友達と協力したり、かわり合いが、ふえたからだと思いました。あと、いままで、おもしろいとかいたことはなかったけど、おもしろいとかいたので、いままでより学校が、楽しくなったのかなと思いました。／これからは学校で、楽しくしたいと、思いました。」（／は改行）

9月から11月にかけて9月の変化はAの振り返りの方法として定着し、その振り返りはたんなる課業（振り返るという形式的な叙述）の遂行に終わっているのではなく、文字通り、自己の活動のモニタリングとして機能している。大きな変化である。11月4日に作成された「ネットワークシート」（シートは9月24日から10月31日に作成）に記述された小見出しとシート例をあげてみよう（《 》は小見出し、「 」はシート）。

《話し合いは大切》「9/24 音楽で、おはやしをつくった時、リコーダーとたいこがうまくあいました。それは、ちゃんと話しあったからだと思います。話し合いは、大切だ！」

《うまくいくとうれしい》「10/27 市で、米とさつまいもを売ってきました。ぜんぶ売れてうれしかったです。安くしたから全部売れたのだと思いました。」

《びっくり》「10/1 英語で日本の教科を英語でいってみる授業でした。一番おどろいたのは、国語をジャパニーズということでした。」

《こんどは気を付けよう》「10/31 家庭科で、ゆめ学年でつくった新米を電子ジャーでたいてたべました。新米は水分が多いのに、水を多くしてしまったので、ベチョベチョしてしまいました。こんどはうまくちょうせつして、たきたいです。」

《成長したなあ》「10/28 今日三時間目の音楽が中止になって、A先生も1組にいました。みんなでいまなにをすればいいのか、かんがえられてよかったです。成長したと思いました。」

《失敗を生かすとうまくいく》「10/29 社会のテストがありました。前、出した後に、まちがえて、後悔したことがあったので、よく見なおしました。まちがいに気づいてよかったです。」

《集中いいな》「9/30 今日国語のレポート作りで、集中して書いたらすごく進みました。やっぱり集中は、いいな！と思いました。」

次に11月4日の「ネットワークシート」作成を振り返った同日の「作文シート」－「学びのシールを整理して」を全文転載する。

「今回学びのシールを分類してみて、「こんどは、気を付けよう」という分類が多かったので、そのことについて、注目して、書こうと思います。シールには、失敗したことと、こんどこうすればうまくいく二つのことが、書いてあります。たとえば、「体育でとびばこのだじょう前転をしました。でもうまくできませんでした。だけど、とびばこのまん中あたりで頭をつくとうまくできることが分かりました。」などです。こうすると、次にする時、うまくできるようになるから、これからもつづけていきたいと思います。」

Aの振り返りの特徴は次の四点に見られる。第1に、活動の具体的な振り返り局面のモニタリング。第2に、そのモニタリングが教科学習の過程にも及んでいること。第3に、「ネットワークシート」の分類と小見出しをモニターし、「作文シート」で、再度、その分類の小見出しから共通特性を読み取り、その意味をモニターしながら、自己の活動に意味づけをし、その修正や継続に役立てようとする。第4に、「失敗を生かすとうまくいく」「集中いいな」の小見出しに見られるように、自己の活動に対する肯定的な評価と、それが強化されていること。とくに第3の特徴に注目したい。

自己調整学習理論では、第3は「自己評価とモニタリング」（これは「生徒が前の遂行と結果についての観察と記録から自分の成果を評価したときに起きる。）」¹⁰に「一あえて当て嵌めると」相当すると考えられる。しかし「自己評価とモニタリング」は、一般理論であることの逆の制約から、実践場面の分析ではあまりも概説的であり、我々が注目しているモニタリングの下位過程であるところに自己観察と自己評価が、Aにみられるように、時間をかけて形成されるものであり、さらにそれがAの思考の特性、すなわち自己調整の能力をなしていることを示唆するに留まっている。

2) Aの自己調整：思考変容の局面

11月28日に「ネットワークシート」にもとづいた「作文シート」－「学びのシールを整理して」が作成されている。ここでは先ずこの「作文シート」を全文掲載する。

「今回を整理してみると、前とはちがって一まい一まいに分かれました。でも、共通点がありました。それは、「大切」や「大事」ということが書いてあったことです。このことから、ふだんの生活の中にそう思うことが増えたのかなぁと思いました。「大事」と思うことは、続けることができるので、そうゆうことが増えたということは、いいことだなと思いました。それに、書いてのこしておけば、また次に見た時、「こうゆうことは、大切なんだな。」と思うことができるので、これからも続けていきたいと思います。」

「ネットワークシート」と「作文シート」で上記第3の特徴である二重の操作が明確に意識されて行われている。一つは、「ネットワークシート」操作で、一枚一枚のシートから「共通点」を見だし、それを分類の基準とし、その「共通点」に命名して小見出しを付ける。いま一つは、その操作の操作である。すなわち、各小見出し間の「共通点」あるいは「大切にしていきたいこと」を抽出し、それに意味づけをしている。その意味づけが、肯定的であることと、次の活動への指針を見いだそうという志向性を含んでいることにも注目したい。

操作の操作は11月28日の「作文シート」以前にも見られたが、この時点でそれがAの振り返りの特性（メタ認知的モニタリング）となっている。この特性は年を越した平成21年1月15日の「作文シート」－「学びのノートが教えてくれること」と1月30日「作文シート」－「学びのシールのふりかえり」ではっきりと読み取れる。順に転載しておく。

「今回の学びのノートが教えてくれることは、「練習は、いいなあ」ということです。一番枚数が多かったし、学校じゃない場面でも、そう思ったことがあったからです。学校では、体育でしていたとびばこの台上前転で、できなかったけど、たくさん練習したからできたことがあったときや、ピアノを習っていて、ぜんぜん練習しないと、うまくひけないけど、練習していくと、うまくひける。などのことがあったので、「練習は、いいなあ」と思いました。最近では、あまりピアノの練習をしていないので、このことをきっかけに、練習をしていきたいです。」

「私は、分類をしてみて、「みんなでする」というのは、大切だなぁと思いました。「みんなでするって大切」とタイトルを付けたシールをみると、後かたづけのことと、もう一つ、JCV（上越ケーブルビジョン：引用者）に見学に行って、みんなで協力してテレビ番組を作っていることが、書いてありました。このシールを見て、後かたづけと、テレビは、あまり関係がないのに同じところに分類したから、いろいろなことに使うのだろうなと思ったので、これからも、みんなで協力するのを、大切にしていきたい思いました。」

ここで、Aの操作の操作であるメタ認知的モニタリング特性から、さらに次の下位過程が再び見いだされる。それは、第1に、「あまり関係がないのに同じところに分類したから、いろいろなことに使うのだろうなと思ったので」に見られるように、自己の思考を分析的・統合的にモニターすること、すなわち自己観察であり、第2に、その振り返りの主体＝自己を意味のある存在として評価する自己評価である。

この下位過程はそれぞれに対応した思考の自己調整を果たしている。第1は「対象としての自己」の調整であり、第2は「主体としての自己」の調整である。Aはこのように操作的に二つの「自己」の視点から振り返りを行っている。自己を対象化してそれをモニターすることによって、自己自身を相対化して意味ある自己としてモニターしている。これが、自己調整学習理論で言う、「自分が自己調整している学習者であるという自分自身に対するイメージ」である¹¹⁾とみなすことができる。

ではAはこの操作を①「学びのシール」→②「ネットワークシート」→③「作文シート」の何れの作成段階で試みているのか。インタビューによると、Aは、①では「一日やったことを一回思い出して、「あ、これ書こうかな」って思ったら、そのことについて書いている。②の小見出しの付け方について、「同じグループにした時に、ここが同じところっていうところを書いているだけ」と述べ、その「共通点」は分類を「やっている最中」に見つける、と答えている。③で「ネットワークシート」から「共通点」を見いだす操作は、「普通に、こういうのが大事かなっていうのを見つけようとする」ことだと説明している。なお、この操作について担任教師の指導はない。

①②③のAの操作は、規範化された手順にしたがって行われているのではなく、Aなりに操作の都度工夫しながら行なわれている。ここで重要な点は、Aの①②③の振り返りにおいて、メタ認知的モニタリングの下位過程（自己観察、自己判断）が明確に見られ、その過程自体がAの肯定的な自己認知の形成になっていることである。

3) 類似層Bとの比較

BとAに共通点が見出される。結論を先に示すと、それは、Bの変化も11月28日を境に見られ、Aのモニタリング特性同様に操作の操作にある。Bも、A同様に「共通点」を見出そうとするが、それを「関係に気がつ(く)」、あるいは「奥が見える」と表現している(A、Bの「作文シート」が感想文でない・感想文にならない背景的理由である)。これを述べた「学びのシート」、平成20年11月28日「学びのファイル」、平成21年1月30日「学びのシールのふりかえり」、そして2月24日「学びのシールのふりかえり」を順に転載しておこう。

「今回、分け方をまた、変えてみました。表みたいに分け方です。この分け方、内容がよく分からないことが、分かりました。／前回とくらべて、変わったことは、文字の量です。このくらいの字から、このくらいの字の大きさになりました。なので、内容も細かくなっています。字の大きさを、小さくすると、今まで書ききれないから書かなかったことも書けることが分かりました。」(／は改行)

「今回はシールを見ていて、特ちょうがあると思いました。全然関係の無いこともあるけど、見方によっては、全部うれしいことです。そして、ムダなことで、ダラダラ書いてありませんでした。一回読んだだけで、忘れていたことも、イメージが出来ました。〇〇があった。〇〇をした。〇〇と思った。最低でも、この三つは、書いてあったからかな?と思います。」

「今回は、整理するのがすごいむずかしかったです。シールとシールのつながりや、そのシールのおくが見えてこなかったからかな?と思います。最近、ポンポン書けることが多かったのだけど、今回はかなり時間がかかりました。だけど、大切なこともあまり見えなかったので終わり。」

以上よりAとBの「ネットワークシート」と「学びのシート」の作成方針の違いを見いだすことができたであろうか。Bは「ネットワークシート」の構造化(分類全体を関係づける)、Aは「ネットワークシート」の分類とそのネーミングにそれぞれ特色を発揮し、「学びのシート」についてBは構造を特徴づけるキーワードから、Aは分類間の共通点から再度活動を振り返っている。Bは、インタビューで語ったが、じつはかなりこの構造化にこだわりをみせていた。平成21年1月15日に作成された「ネットワークシート」では、分類に→を付して活動の展開を示す工夫をみせている。Bの説明では「ここではっつけようと思ったら、このあとに、あの、この2つの関係に気づいて、あー、じゃ、だったらこうしようかなっていうふうになっただけ。」という言い方になる。

いま一つの類似点は、上掲した平成21年1月30日「学びのシールのふりかえり」に典型的に見られるように、肯定的自己評価があげられる。ここで述べられた「全部うれしいこと」は、「ネットワークシート」上での小見出しとシートでみると、次のようになっている(《 》は小見出し、「 」はシート例)。Aと同じように、肯定的な評価が読みとれ、それが次の活動への意義づけ・動機づけを強化している。

《楽しみになれるのはすごくうれしい》「1/23 お話を考えました。仮の題だけれども「昔、昔」か「ロング・ロング・アゴー」にしようと思います。早くできたら、なかよし読書で読みたいです。」
 《がんばってやったことが終わったり、成功するとうれしい》「1/14 版画をしました。夏のすな浜が終わってバンザイです。今度はネコをほろうと思います。今日は給食当番でそうじができませんでした。でも、来週からは、そうじもちゃんとしようと思います。後、やってくれた人、ありがとうございます。」
 《めあてがあると、けっこうがんばれる》「1/21 マーチングの練習をしました。マーチングドリームは、けっこうかんたんでした。でも、⑦はむずかしかったです。だから⑦を特にならそうじようと思います。」

相違点はBが、Aに比べてストレートに自己観察と自己評価に向かっている点にある。この点も「学びのシート」,平成20年12月19日の「学びのノートをふりかえって」と平成21年1月15日「学びのノートが教えてくれること」から見ておこう。

「一番変わったのは、分かりやすさです。一学期のシートを見ると、意味が「ぜんぜん」分からないのはいっぱいあります。最近のは、けっこう「何をして どうしたから どう思った」というのが書いてあります。例えば「昼休みに〇〇をして遊びました。たくさんの人でやったので楽しかったです。」など。短くても分かります。前は、余計なことばかり書いてあったので分かりづらかったのだと思います。／関係ないかもしれないけれどわたしは、人生、行きあたりばったりで生きているなあと思います。特に、そう思うのは、先生の話の聞いている時に思います。学びのノートって行きあたりばったり生きている人にピッチシかもと思いました。理由は、行きあたりばったりだと、「何したっけ?」とやってやったことを忘れていて、同じまちがいを何度もしてしまうからです。」(／は改行)

「今回の分け方は「〇〇が→〇〇になった」という分け方にしました。でも、時間がなくて、タイトルは、てきとうだと思います。だから説明。／かたづけ→人まかせにしないで自分からできた。／ボランティア→人のために何かやって、それを喜んでもらえるのは、うれしい。／分かった→分かる→けっこう、うれしいです。／今回の中で一番大切だと思うのは、「テスト」のと「習字」です。書いてあるけど、勉強したり、練習しておくといいと思います。理由は、習ったことをそのままにしておく→忘れるけれど、読んだり書いたりするとおぼえられるからです。これをシートに書こうと思ったのは、「大切だと思っているけどできないから」です。」

見られるようにBは自己の性格の弱さを描き出している。このような自己の性格の観察はBに特有である。この性格観察を否定的な評価であると解釈するならばBの意図にフィットしていない。Bはこの性格観察によってその弱さを反省・克服することを意図している。Bのこの反省・克服の傾向はAよりも強い。この強さは何を示唆しているのか。

想定されるのは、「対象としての自己」の調整と「主体としての自己」の調整における反省と修正の傾向 —調整を意識的にコントロールする能力— が強く働くのかもしれない。Bは1月15日作成の「ネットワークシート」で分類と分類の関係についてコメントしたシートも貼り付けていたが、その意図を尋ねたところ、「やっぱ(シートを)はり付けている時に思って、それで、大切だなって思ったら、メモみたいに、書いておいて後で(はり付けた)」(括弧は引用者の補足)と答えている。いま自分が行っている活動に対する自覚とその後の活動への判断に注意がよく向くということかもしれない。

4) 対極層C, Dとの比較

「「学びのシート」を書くことによって、まず、書きたいっていうか、書けるやつを、一日やったことを全部思いだす」。これはインタビューで増井が質問したことに対する同席したSの返答である。これにAもBも頷いていた。「書きたいっていうか、書けるやつを、一日やったことを全部思いだす」(傍点引用者)には「学びのシート」→「ネットワークシート」→「作文シート」の作成が必要である、あるいは適切に機能していると考えられる。ではA, B以外の子どもも同様の操作が行われているであろうか。

ここで対極層C, Dの操作の特徴について見ておきたい。A, Bの操作に大きな変化が見られた11月28日の「作文シート」—「学びのふりかえり」に注目してみよう。

「自分がこの学びをふりかえって成長したことはありません。理由は、やるってときにめんどくさくなってとなりとしやべってばかりで後にまわすことが多くなり先月よりも悪くなったと思ったからです。そこで自分の目標とし

て、学びのシールなどをさぼらずにやると自分の目標に決めました。この目標をやりとげたいです。」

「ぼくが一番大切だと思っていることは、心にのこったことを学びのノートだけでなく作文などにまとめたりするのが大切だと思います。理由は、その書いたことをまたふりかえることによって、「へえ～こんなことがあったんだな。」といろいろな想いでがふりかえられるしこのまえの自分とは、少し変わったことも気づけるからです。」

「ぼくにとって学びのファイルは、まえの自分と今の自分がどうちがったかどう成長したかなどとまえの自分、今の自分のちがいが分かっていいなと思います。理由は、そのふりかえたことを見たり読んだりするといろいろなひらめきやなつかしさがかんじていいと思ったからです。」

Cの「作文シート」にはA、Bのような「ネットワークシート」の分析がみられない。A、Bの分析はほ一ヶ月の活動を振り返り、「大切なこと」を記述することであった。Cの「作文シート」は自分にとってこういうものでありたい、こういう点がいい、という記述スタイルになっている。11月28日作成の「ネットワークシート」を見てみよう（《 》は小見出し、「 」はシート例）。

《よかったやら悪かったやら》「10/16 今日の20分休みにハンドベースをしたところ今日は、まああの打球でした（がいやにいった。）」

《きがあうかも》「9/12 英語の時間ロバート先生とのじこしょうかいでけっこうなかよくやれそうなきがした。」

11月まではこのような小見出しとシートが多数を占めていた。さらにシート数が少ないこともCの特徴である。しかし12月19日の「ネットワークシート」に変化が見られる。その変化の特徴は、肯定的と否定的に自己を評価するシートの分類とその小見出しが見られることである。前者の小見出しでは《やればできるんだな》、後者は《ぼくさいのうあるのかな》である。後者のシート例をあげておこう。

「12/2 5, 6時間目の図工の絵でぼくはバスケットの絵をかきました。自分なりにへたくそだなと思いました。」

「12/16 しゅうじの時間どうしても字がほそくなってなんどもかきなおしてもほそくなっていい物がありませんでした。」

この変化は、否定的な評価が消えていくことに応じて、肯定的な評価を記述したシート数が飛躍的に増加していくことにある。そのことはCも自覚していた。それを示す3月17日の「ネットワークシート」と「作文シート」、「学びのノートをふりかえて」を順に紹介しておこう（《 》は小見出し、「 」はシート例）。

《本番までにガンバトルで～》「2/23 今日の5時間目は、マーチングバンドがありました。今日は、なんだかこうし（講師）からこまかいとこまでビシバシやられてつかれました。でも本番まであと四日です。がんばります。」（カッコ内は引用者の補足）

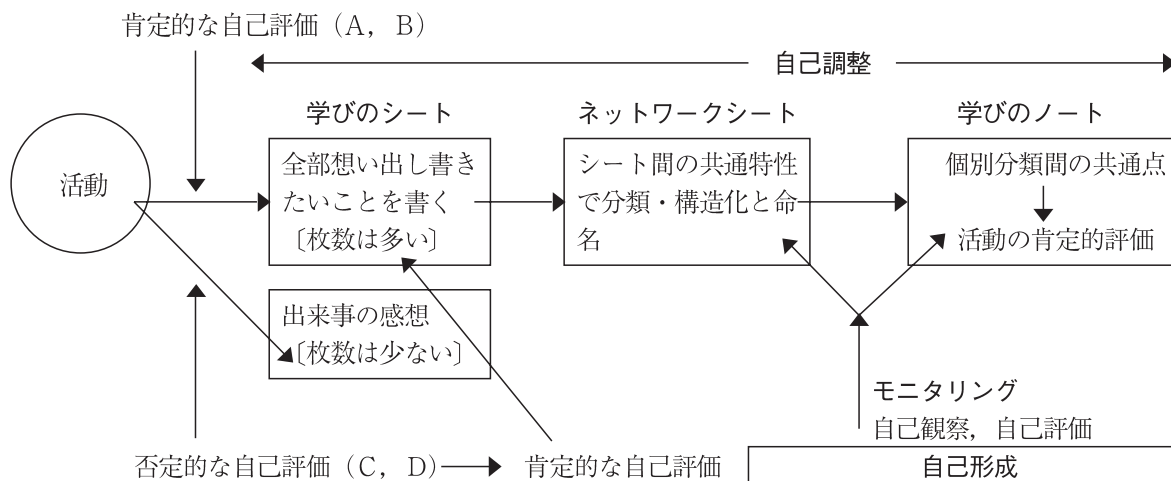
「学びのシールがまえよりもふえてることに気づきませんでした。やはり分類は、いいなと思う。三学期、ぼくがかいてきた学びのシールの枚数は、五十二枚でした。二学期よりもドッとましました。分類してみたらけっこうざっしりありました。三学期の間ぼくは、こんなにかいたんだと自分でもすごくおどろきました。みんなもぼくの枚数よりも多い人がいっぱいいました。百枚は、知っている人も。その人たちは、思ったことがたくさんあるんだなと思えます。みんなすごいと思いました。」

Cのシール数の増加は、第1に、自己評価が肯定的に変わっていること、第2に、目標の実現にむけての活動（本番に間に合うようにマーチングバンドを練習）に自覚的になっていることに困っている。このことはDにもあてはまる。同じ3月17日の「作文シート」－「三学期の学びのシールを整理して」でも読み取れる。

「三学期のシールは、七十九まいでした。二学期のシールのかずは、四十まいでした。三十九まいもふえました。／一番多かったのは、「すごくよかったこと・がんばったこと」です。まい数は、二十九まいでした。とても多くてびっくりしました。／とくにに多かったのは、「がんばりたいこと」で、まい数は二十一まいでした。こんなに「がんばりたいこと」がいっぱいあって、「もっとがんばらなくちゃ」と思いました。」（／は改行）

4 総括

5年生A, B, C, Dの「学びのノート」を主たるデータとして、彼らの自己調整の仕方について考察してきた。ここでは、キーパーソンAをもとにしながら、比較した結果を図で示してみたい。



この図は、平成20年度5年生の「学びのノート」の作成が十分に行われているA, Bと十分に行われていないC, Dを比較し、この両層を一つにまとめて自己調整と思考の関連図を示そうとしたものである。

この関連図から見えることは、「ネットワークシート」の分類または構造化と「学びのシート」における共通点の発見と、その共通点から再度活動を肯定的に評価する、反省するという操作の操作が、自己調整に重要な役割を果たしていることである。操作の操作を可能にする思考の変容に注意が向けられる必要がある。

「学びのノート」は、このような思考の変容によって肯定的な自己観察と自己評価がモニタリングの下位過程として機能するとき、自己を客観的に見とり、自己の行動を決定していく自己形成の役割を果たしている。

なお我々の協議で問題になったのは、他の教科学習の影響をどのように考えるかという点であった。この作用を特定することは困難であるが、A, B, C, Dの教科学習における自己調整についても検討する必要性が確認された¹²⁾。

肯定的な自己評価が我々の研究では重要な下位過程として浮かび上がった。朝井はとくにAが肯定的な自己評価をする要因について次のような仮説を提示した。すなわち、①精一杯取り組んだとき、②自分の力が伸びたと自覚できたとき、③他人のためになれたと自覚できたとき、④取り組んだことで成果が見られたとき、⑤うまくいかなかったことを生かせたとき、⑥他者に肯定的な評価をもらったとき。我々の討議でもこの6点は合意された。

活動は、自分の良さ・面白さを感じとられたときに、多面的に記述される。子どもがその活動を多面的に思い出すのは、自分のことが肯定的に振り返られるときである。つまり、自分のことが肯定的に振り返られるときに、友だちとの関わりが様々に思い出され、一所懸命取り組んだ活動の成果が自分で感じられたとき、「書きたい」という行動を生起させる。また進んでやろうとしなかった活動も敢えてやろうとするときに、それは「書きたい」活動になる。このように子どもは肯定的に思考する、あるいは修正する志向性をもっている。

「学びのノート」の作業は、「学び」の活動のいまを客観的に分析的に観ることを可能にし、「学び」による成長を肯定的に自覚する経験の場となっている。これが我々の検討で合意された点である。しかし、今回のデータは4名であり、データ自体を増やし、上記の2点の妥当性について検討を重ねていくことがいま一つの今後の課題となる。

註

- 1) この用語は、バリー・J・ジーマン、ディル・H・シャンク、塚野州一編訳『自己調整学習の理論』北大路書房、2006年、5頁の「生徒たちは、自分自身の学習過程の中で、メタ認知的に、動機的に、行動的に積極的な関与者であるその程度に応じて、自己調整する」から援用したが、傍点箇所を削除している。その理由は、出来るだけシンプルで分かりやすい表現にするためであり、この箇所を削除してもその意味は変更されない（むしろ自明のことである）からである。
- 2) バリー・J・ジーマン、ディル・H・シャンク、塚野州一編訳『自己調整学習の理論』162頁。

- 3) 増井三夫・村山信一編著『子どもの思考が創造的に展開する局面の見極めと教師の指導 大手町小学校との共同研究』上越教育大学研究プロジェクト研究報告書, 2009年所収。
- 4) 日本教育心理学会『教育心理学年報』第48集(2008年度), 2009年, 115-116頁。なお, そこでレビューされている研究報告は, 2008年10月の日本教育心理学会自主シンポジウムE5「自己調整学習の視点から学習指導を考える」で報告されたが, 次の研究報告書で全文掲載されている。鈴木美幸「振り返りと願いの意識化 1年生の創造的な思考活動」及び石崎洋子「振り返りと話し合いにおける思考活動 4年生算数科授業にみられる課題解決の諸相」, 増井三夫・村山信一前掲編著所収。
- 5) 鈴木前掲論文43頁。
- 6) 鈴木前掲論文52, 56頁。
- 7) 松崎正治・荻原伸「物語文の理解と記憶におけるメタ認知方略の効果と発達」, 全国大学国語教育学会『国語科教育』第40集, 1994年, 41頁。
- 8) 岡本夏彦「算数文章題の解決におけるメタ認知の検討」, 日本教育心理学会『教育心理学研究』第40巻第1号, 1992年, 86頁。
- 9) 御所南コミュニティ『学校大好き! コミュニティ・スクール』御所南コミュニティ, 2004年, 25頁, および2008年12月9日に実施した御所南小学校教頭へのインタビューによる。さらに京都市立高倉小学校『「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む高倉教育～学校・家庭・地域・大学の連携～』2009年, 92, 93頁。
- 10) バリー・J・ジーマーマン, セバスチアン・ボナー, ロバート・コーバック, 塚野州一編訳『自己調整学習の指導』北大路書房, 2008年, 10頁。
- 11) バリー・J・ジーマーマン, デイル・H・シャンク, 塚野州一編訳『自己調整学習の理論』87頁。
- 12) 我々の研究結果が教科のメタ認知研究の成果と乖離していないことも例えば次の研究で認められる。加東久恵「数学的問題解決におけるメタ認知の役割に関する研究(Ⅱ)ー小学4年生と6年生のメタ認知に関する実態調査を中心としてー」, 全国数学教育学会『数学教育学研究』第4巻, 1998年, 105-113頁。

Transformation Possibility of Thought by Self-regulation

— Analysis of “Learning-Note” in Otemachi Elementary School —

Mitsuo MASUI* · Akira NODA** · Michiyuki TANABE** · Yoshito ASAI**

ABSTRACT

In the area of learning theory and educational practice study, self-regulation is important themes in the research and practice. The problem is to clarify mechanism of self-regulation of the learner in an actual learning process. This paper tries to clarify this problem through using “Learning-Note” as data. We obtained the following conclusions: a) the description of “Learning-Note” become monitoring of thought and self-observation of the entire activity of self, b) when this description has strengthened positive self-evaluation, we was able to find the self-regulated activity.

KEY WORDS

learning note self-regulated learning meta-cognition

* School Education ** Otemachi Elementary School